

一度は食べたい! はん 祁答院地域のばあ飯(バーハン)



ふくざき てるみ
福崎 照美さん

私の Food 記

薩摩川内風土記

レシピ

【材料】(4~6人分)
 ●もち米:600g ●鶏肉:100g ●ワラビ(塩漬け):40g ●タケノコ(塩漬け):60g ●ゴボウ:40g ●ニンジン:40g ●干しシイタケ:中2枚 ●さつまあげ:1枚 ●かまぼこ:1/2本 ●グリーンピース:適量 ●油:小さじ2

【調味料】
 ●砂糖:大さじ1 ●酒:大さじ1 ●薄口しょうゆ:80cc ●だし汁(干しシイタケの戻し汁):80cc

【作り方】
 ①作る前日にもち米は洗って、一晩水に漬けておき、水切りする。塩漬けのワラビ、タケノコは十分に塩抜きする。干しシイタケは水に戻し、戻し汁はだし汁にする。
 ②鶏肉など、全ての材料は小さく刻む。
 ③鍋に油を入れ、鶏肉をさっと炒め、他の材料を順次加えて炒める。だし汁と調味料を加えて、さらに10~15分くらい煮込む。その後は、具と煮汁は分けておく。
 ④湯気の上があった蒸し器で、もち米を30分くらい蒸し、いったんボウルに取り出して③の具を混ぜ合わせ、もう一度蒸し器で15分ほど蒸す。途中、③の煮汁を2回くらいに分けてかけながら蒸すと良い。

※もっと簡単に作る方法もありますので、興味のある方はぜひお電話を!
 祁答院大村北部生活センター 福崎さん
 ☎(55)0893

田植えや稲刈り後の慰労として、また、お正月の餅つきをした後などいろいろな人からお手伝いをもたらした時には「ばあ飯」という祁答院地域に伝わる山菜おこわを食べていますと語るのは福崎照美さん。

福崎さんは生活研究グループの一員で、料理の講習会を開催したり、食生活の管理・指導をしたりと忙しくも充実した日々を送っています。

ばあ飯はもち米がごちそうだった頃の一番のおもてなしで、お正月の料理の締めとして出されたり、作る時にはたくさん作って近所に配り喜びを分けていたそうです。ただ、「山菜おこわ」ではなく「ばあ飯」というこの呼び名は祁答院地域だけでしか聞いたことがなく、どうしてそうなったのか分かっていないとの事。

明治28年に祁答院町上手で食味

～ワンポイント～

タケノコやワラビは、旬の物を一年分塩漬けで保存しておき、その都度塩抜きして使う。蒸したもち米をいったん取り出して、具と十分に混ぜてから、再度蒸すのがコツ。

皆さんの思い出の料理を大募集

皆さんの思い出の料理とそれに関わるエピソードなどがありましたら、どしどし情報をお寄せください。取材に伺います。

問合せ/広報室広聴広報G(内線633)

人のとなりに

ののくお
野久尾 忠さん
(66)

「人のとなりに」とは…
 文字通り、その人の隣にいて、思いに寄り添うことや人柄を表す言葉「人となり」をイメージした新コーナーで、人物や活動の紹介だけでなく、その人の思いにスポットを当てることを目的としています。

東郷文弥節人形浄瑠璃

東郷町斧淵に伝わる東郷文弥節人形浄瑠璃は、江戸時代から続くことされる東郷町斧淵地区を中心とした伝統芸能で、延宝(1673年)のころ大阪で人氣のあった伊藤出羽一座の岡本文弥の系統と考えられています。

人形浄瑠璃は、三味線を伴奏楽器として、太夫と呼ばれる語り手の唄に合わせて、人形遣いが人形を操る三位一体の人形劇です。

平成20年には国の重要無形民俗文化財に指定され、今年9月17日にはキワニス日本財団から県内の団体・個人では初となる日本キワニス文化賞を贈呈されました。

継承していくことへの決意と継続していくことの難しさ

東郷文弥節人形浄瑠璃保存会は、現在、大人14人、子ども5人の計19人で活動をしています。会長の野久尾忠さんは、12歳の時からもう54年もこの人形浄瑠璃に関わり続けています。

「国の無形民俗文化財に指定され、今回は、日本キワニス文化賞を頂き、身に余る光栄であると感じるとともに、決して絶やすことはできないなああと引き締まる思いです。と同時に、続けることができなくなれば、こ

の名誉ある指定や賞を返還しなければならぬという重責も感じています」。

保存会が直面するのは、伝統芸能を継承する団体のほぼ全てが抱えるであろう後継者問題。

「二番の課題は、やはり後継者をどう確保して育成していくかということ。東郷学園義務教育学校では、コミュニティ・スクールの一環で、東郷地域内の伝統芸能などに触れてもらうきっかけを作ってくれています。それを入り口として、子どもたちが興味を持って練習を見に来てくれたりすることもあります。でも、やっぱり続けていくとなると難しい。今は、斧淵地区内や東郷地域に限らず、受け入れを広くしています。子どもたちに参加してもらおうとなると、どうしても保護者の皆さんに送迎してもらわなければいけません。保護者の負担も大きい。そういうところに難しさを感じています」。

保存会の思いは「未永く継承していきたい」その一点のみ

保存会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、年に3回実施してきた公演を昨年度から中止することを余儀なくされました。

人形浄瑠璃は、男の人形は一人で、女の人形は二人で操るために、息を合わせて遣い手自身

が踊らなければ、生きた踊りになりません。

披露する機会を奪われることは、練習する意義や意欲にも多大な影響を与えます。ましてや、新型コロナウイルスの影響で、保存会は、練習することさえままならない状況へと陥りました。しかし10月、県独自の緊急事態宣言解除を受け、保存会は11月7日(日)の黒木小学校での公演に向けて直ちに練習を開始しました。

「保存会のみんなは、「この人形浄瑠璃を未永く継承していきたい。継承していかなくてはならない」その思いのみでつながっています。「やりがい」とか『楽しい』の前に、先人たちの築いたこのよき伝統を未来に必ず引き継いでいく。その強い決意を持って私たちは、これからもこの東郷文弥節人形浄瑠璃を守りつないでいきます」。

決意を胸に野久尾さんは、今日も指導に、時には自ら人形遣いとなって、仲間たちと汗を流しています。



▲54年間人形浄瑠璃一筋の野久尾さん

平成20年に国の重要無形民俗文化財に指定されている東郷文弥節人形浄瑠璃。今回は、後継者不足に悩みながら伝統文化を守ろうとする保存会会長の思いに寄り添います。

